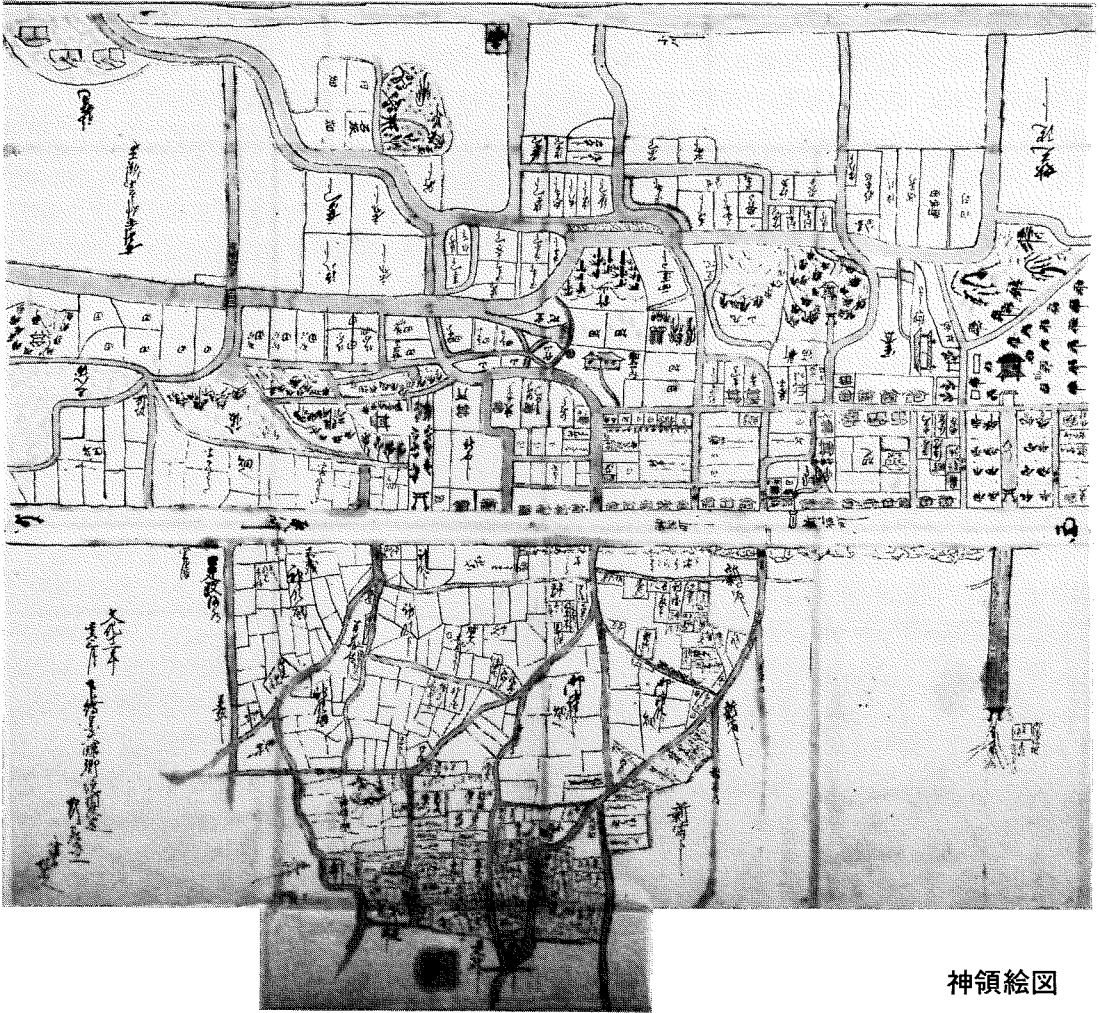


# あるむぜお

府中市郷土の森だより

No.8

al museo



絵図 文化12年(1815)

江戸時代、六所宮(現大国魂神社)は500石の社領寄進を受けていました。そのほとんどは神社の東側一帯を占める八幡宿(現八幡町)にあたります。

1.5km四方ぐらいの地域が描かれています。田畑の持分、道や坂の名前、またユーマを誘う筆致の建物や風景は、現況の町並と見比べて大変興味深いものがあります。

企画展

7月9日～9月3日

# 宇宙開発展 — 日本スペースシャトル —

今年6月28日、宇宙開発委員会は5年ぶりに我が国の宇宙開発政策の指針となる政策大綱を発表した。それには、①独自の有人宇宙活動を目指す ②民間の宇宙活動を促進する 等が盛り込まれています。発表の背景には現在までのロケットの開発、宇宙探査や人工衛星の打ち上げ等の研究・開発の成果が高く評価されたこと、国際舞台での協力推進やGNPの拡大などが考えられます。

今回の企画展では、日本の21世紀の本格的な有人宇宙活動の展開に向けて、開発中のH-IIロケットのしくみと役割や、無人有翼回収機(HOPE)のしくみ、国際協力による日本の果たす役割、そして宇宙ステーション構想の一端を紹介することを主眼としました。

日本版スペースシャトル“HOPE”への研究の原動力は、アメリカのスペースシャトルの数々の実績、昨年のソ連版スペースシャトル“ブラン”の成功によるところが大きいと考えられます。

展示したアメリカのシャトル搭乗員自らによる船内・船外活動の記録写真は、私達に宇宙をより身近に感じさせてくれます。

ロケットの展示では日本のN・H型やM型ロケットの縮尺模型があります。中でも現在開発中のH-IIロケットの1/15の模型は目を見張るものがあります。これらの他、“ひまわり”

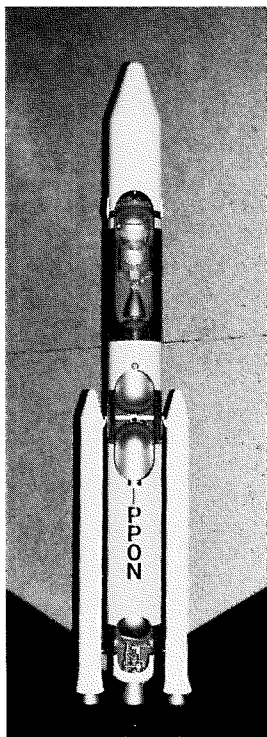
“ゆり”等の実用衛星や“たんせい”“ざんが”等の科学衛星、国際協力による“インテルサット”等の実用通信衛星の実物および縮尺模型13個も展示し、運用方法、役割を説明しています。

また、宇宙開発に興味をもって頂くために、74か国、480種の切手の展示コーナーをテーマ別、発行国別に設けました。詳細に見ると驚くことに、開発中のH-IIロケットとHOPEの図案を用いたものが既に発行されています。切手一つにもいろいろお国柄も恩ばれます。

この企画展をとおして、宇宙への人類の夢が一步一步実現へ近づいている事を理解していただければ幸いです。

## ☆出品協力

NASA, ISAS, 郵政研究所付属資料館, 武蔵府中郵便局 NASDA, 船の科学館, KDD, ㈱二コン, B. C. C.



H-IIロケット模型

## 展示のほかに

### 映画会

\*7月21日(金) 8月4日(金) 8月18日(金) 午後1:30～ 各回2本づつ上映  
\*宇宙—未来への旅立ち— \*宇宙—そのはじまり— \*私たちのひまわり など

### プラネタリウム

\*宇宙への旅立ち—スペースシャトル物語 part2

## 旧田中家住宅

郷土の森に入り、博物館本館を背にして園内を見渡してみますと、まずメインストリート・けやき通りの左手に白壁の蔵並が目につきます。

この建物は今年3月に竣工した旧田中家住宅の蔵並で、正面に回ってみますと、中央に大きな門構え、その右に土蔵、その左に店の部分のある、府中でも指折りの商家です。

江戸時代、五街道のひとつとして甲州街道が整備されますと、本町・番場宿・新宿からなる府中宿が成立し、またその東側には六所宮（現大國魂神社）の社領である八幡宿が成立しました。府中宿は、甲州街道では八王子の横山宿につぐ大きな宿場で、華やかな宿場町として周辺農村のさまざまな生活の中心であり、文政10年（1827）以降は「宿中宿外二五ヶ村組合」の寄場として、取締りの中心でもありました。

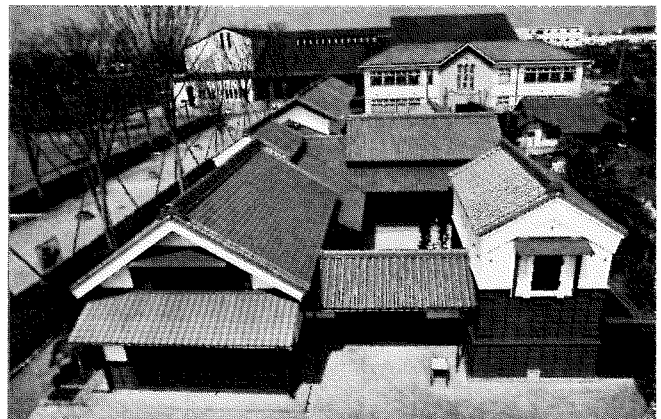
この府中宿にあって、田中家は屋号を「柏屋」と称し、天明年間（1781—1789）より升酒や反物、荒物の商売を営み、次第に宿内の大店に成長していきました。天保年間（1830—1844）には穀物や旅籠屋も営み、明治には質屋をも営業していたことが史料から窺われます。ちなみに明治5年（1872）の田中家の土地の持高は95石余で、新

宿はもとより、府中3町の中でも最大の土地所有者であったことがみえ、こうしたことから、明治天皇行在所として、休憩や宿泊に使用されました。記録によりますと、明治13年（1880）から同17年までの間に5回、行在所使用がみられます。

旧田中家住宅の特徴は、間口が狭く奥行が深い、街道に沿った町屋特有の短冊型屋敷割の中に、①奥座敷（明治天皇御座所）を中心にして②府中宿第一の風格をもつ表店 ③表店と並んで建つ表蔵（土蔵）④その中間に構えられた本瓦葺の表門（御成門）⑤表門より露地を隔てて建つ式台付の玄関・座敷 ⑥表店裏の生活機能部 ⑦敷地側面を取り囲む蔵並といった要素が、各々建築的価値を有し、さらにそれらが調和のとれた構成となっていることです。

郷土の森では昭和58年、保存されていた奥座敷（御座所）を解体し、文化財移築修理工事として復原し、他の建物は現存する平面図や写真資料などからも十分に検討を重ね、また活用を考慮しながら実施設計して、府中宿の大店として旧田中家住宅を復原しました。（G）

旧所在地	府中市宮町1-8
解体	昭和58年12月～昭和59年1月
復原	昭和62年12月～平成元年3月
構造	木造平屋一部2階建 鉄筋コンクリート2階建
延面積	731.45㎡
設計・監理	早稲田大学建築史研究室 (代表)渡辺保忠
施工	(株)住友建設他



旧田中家住宅全景

（後方は旧府中町立府中尋常高等小学校と博物館本館）

# 民具の調査研究

前号までで民具が収集され、整理されていく過程をご紹介しましたので、今度はこれら民具をどのように調査研究し、そのうえでどう活用していくのかをご紹介します。

## ＝調査研究の意義＝

なぜ博物館は古い民具を集めるのか、それは趣味、骨董的なことではなく、また単に昔を懐かしむ、懐古的なことでもありません。収集した民具を調査研究することによって、祖父母や両親がどのような生活をしていたのか、またその前の先祖はどのような暮らしを営んでいたのか、そして大切なことは、それが現在の私達の生活にどのように関連しているのか、このようなことを考えるのが民俗学といえるでしょう。従って決して懐古主義ではなく、過去から現在、そして将来へと続く今日的課題であるのです。そのひとつの証左となる民具を調査研究すること、それが民具学といえるでしょう。

## ＝調査研究の具体例＝

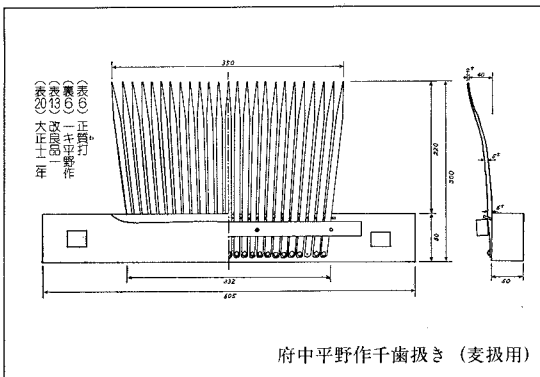
それではここで具体例をあげて紹介してみます。米や麦の脱穀に使う千歯扱きという農具があります。千歯扱き出現以前は、竹で作った扱き箸や扱き棒といわれるもので細々と脱穀されていたものが、千歯扱きの発明により飛躍的に

脱穀の能率化がはかられたため、後家の仕事がなくなり“後家倒し”と呼ばれることになります。この江戸時代に出現し普及した千歯扱きも、大正時代の足踏み回転脱穀機の出現により、急速にその姿を消していきます。しかし足踏み回転脱穀機移入後も、千歯扱きは細々ながらその命脈を保ってきました。それは翌年の種籾だけは、足踏み回転脱穀機ですと傷つけやすいため、千歯扱きにより大事に大事に扱かれたのです。それがいつの間にか物置の片隅におかれ、あるいは縁の下に追いやられ、やがて家人にも忘れられていきます。しかしあるきっかけで、博物館資料として、その存在が認められることになるのです。

現在郷土の森で所蔵している千歯扱きは、約30点あります。なぜ同じものをこんなにたくさん集めるのか、1点あればいいのではないかと、などという声も聞かれます。しかし歯(穂)に年号や作者等が刻まれたり、その形状をよく観察してみると、どれひとつとして同じものはありません。一点一点それぞれの顔をもっているのです。時代が新しくなるにつれて、歯の本数は多くなり、長さは長くなり、歯の断面は長方形から、面取りしたものや半円形、三角形など、種類が多くなっていく傾向がみられます。歯と歯のすき間の差異については、米と麦との基本的な相違によることが多く、また歯の刻書や台木の焼印からは生産地等が判明します。

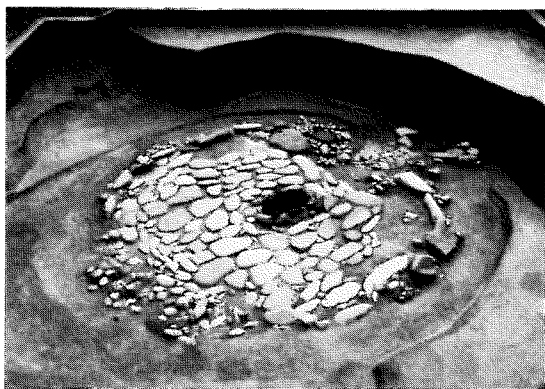
こういった成果は、一行政区の調査研究では限界があります。できるだけ多くの資料を収集し、他地域の成果もふまえながら比較検討していきます。そこで資料それぞれの、多摩地区あるいは南関東といった地域の、また土地条件、立地条件等による特徴がでてくるわけです。

民俗学の調査研究の仕方には、いろいろな方法がありますが、今回は民具研究の一例をご紹介します。(G)



## 柄鏡形敷石住居址の復原と“石材”の観察

英 太郎

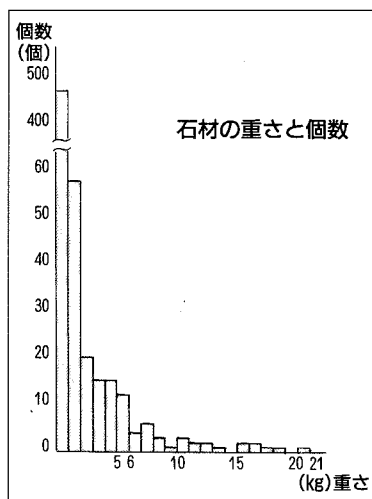


I 郷土の森園内の展示施設に、新たに「柄鏡形敷石住居址」が登場しました。この住居址は府中市遺跡調査会により、昭和56年に市内の清水が丘1丁目において発掘された縄文時代の遺構です。発掘調査から7年の歳月を経て、ここに甦りました。調査の際に、その検出状況が実測図や写真によって詳細に記録されましたが、その時の緻密な仕事が今回の復原にあたって、大いに役立ちました。「柄鏡形」という名前の由来は、堅穴全体の形が近世の手鏡（柄付の鏡）に似ていることによるものです。

II 柄鏡形敷石住居址の復原は、発掘された遺跡や遺構の造形保存の専門家として著名な、考古造形学研究所の森山哲和先生にお願いしましたが、その作業に並行して敷石の石を観察してみることにしました。復原に当たっては、まず最初に、調査時の実測図に基づいて敷石の石材を並べていきましたが、その数を数えてみますと、敷石の総数はおよそ600個の石材から成っていたことがわかりました。個々の石を観察してみると、ほとんどの石材は川で円磨された礫で、石の種類という点では、砂岩が大多数を占めていました。いずれも、その石の最も平らな面を選んで床面に使っているようでした。中には明らかに加工を施しているものもあり、まるで、ジャガイモの真ん中をナイフで切ったように打ち割り、それで出来た平滑な断

面を上向きに使っていました。なお、砂岩以外の石の種類では、花崗閃緑岩・緑泥片岩・溶岩などがありました。その多くは本来、石器だったものが破損後に転用されたものようでした。

つぎに個々の石材の重量を計ってみました。その重さは1kg未満の軽い石から、20kgを超える重い石まで様々でした。最後に全ての石材の重量を合計してみると、およそ870kgにもなりました。石材を重量別（1kg毎）に分けてその個数を数えてみると、1kg未満の石が圧倒的に多く、全体的に見ても6kg未満の石が多いことがわかりました。6kg～21kgの重い石になると急に数が減るのは興味深いことです。ただし、これはあくまで個数の上でのこ



とで、総重量に占める6kg未満の石とそれ以上の石の占める割合はほぼ半々でした。なお、重量と敷かれた位置の関係という点では、写真からもわかるように、

大形の石は柄と炉の間の部分、柄と炉を結ぶ直線上にあたる奥の部分の床面に多く配置されている傾向がありました。

III 敷石の石材について、いろいろと観察してみました。つぎにそこから、少しだけ想像を膨らませてみたいと思います。そのひとつは、この住居に使われた石材が、いったい、どこから運ばれてきたのかという問題です。石材が、重量により、大まかには2種類に分け

られそうなことは、さきにも述べました。また、石材の石質という点では、その特徴からみて、現在市域南部を流れる多摩川の川原の石と大変よく似ているように思われます。もちろん現在の多摩川と当時の多摩川の水量や流路には違いがあると考えられるので、一概に比較することはできないかもしれませんが、それを比較することにより、石材の採集地を探る手掛かりを得ることができるかもしれません。



敷石を裏側からみた状態

たとえば、6kg以下の軽い石材について比較してみるなら、これは、形状、重さ、粒の大きさなどの点で、市内の河原の石とほとんど同じとあってよいほど似ています。このことから、敷石住居を造るのにあたって、たくさん使われた軽い石については、遺跡の近くの崖線下を流れていた、当時の多摩川の河原から拾って住居

まで運んだことが想像されます。では、6kg以上の重い石、特に20kgもある石はどこから運ばれたのでしょうか。実はこうした石は、府中東部の河原では見ることができないのです。現代の多摩川では、少なくとも日野橋付近（約8km上流）に遡らなければ見ることができません。ですから、これらの重い石については、上流の河原から運んできた可能性を考えるべきかもしれません。石材の採集地について以上のように、想像を巡らせてみたわけですが、このことから大きくて重い石でも、それに必要性があれば距離に関係無く、苦労もものともせず、運んできた縄文人の意気込みが感じられるように思うのです。さて、そう考えてみると、ことによると石の大きさや重さは、住居内におけるその位置の重要性とも密接に結び付いていたのかもしれませんが。柄鏡形敷石住居址の石材の重量は、今回観察してみたように、その重量と分布域を調べることによって、今後、新たな発見ができるかもしれません。

以上、柄鏡形敷石住居址の復原に伴っておこなった敷石“石材”の観察について、簡単にまとめてみました。なお、この住居址が発掘された清水が丘からは、これまでも多くの縄文時代の遺構・遺物がみつかり、その一部が博物館常設展示室に展示されています。

## [昭和63年度 寄贈・寄託資料一覧]

### ■寄贈資料

	寄 贈 者	資 料 名	分 類	数 量	備 考
1	青木 一良	日本地誌略字引 他	教育	59	
2	小島 信男	箆筥 他	民俗	6	
3	鹿島 善蔵	大八車 他	民俗	15	
4	金井 英一	炭火アイロン 他	民俗	19	
5	佐伯 利雄	臼 他	民俗	4	
6	沢井 寛司	石臼の台 他	民俗	24	
7	浦野 清勝	多磨村役場設計図面 他	歴史	2	
8	山崎 マサ	箱枕 他	民俗	4	
9	田中 茂雄	発動機	民俗	1	

10	田中 マサ	タテビキノコ 他	民俗	17	
11	阿部倉賢三	台秤	民俗	1	
12	川村 善吉	打製石斧	考古	1	
13	関田 五郎	臼 他	民俗	2	
14	村越惣十郎	酒樽	民俗	2	
15	小川 甚吾	湯タンポ	民俗	2	
16	安斎 正規	中学校教師用社会科指導書他	教育	340	
17	藤田 守男	国民読本 尋常小学校用 他	教育	2	
18	鶴田 孝一	フランス巡回記念 浮世絵名作展 図録 他	図書	928	
19	野尻 和子	国語答案	教育	316	
20	関田 実	二ツ組箏笥	民俗	1	
21	伊藤 恒子	煎餅焼	民俗	1	
22	杉本 初枝	アンカ 他	民俗	3	

#### ■寄託資料

	寄託者	資料名	分類	数量	備考
1	島田 雪江	一六居士題「島田薬舗」	民俗	1	
		三十七年間覚帳 他	歴史	4	
2	二俣英五郎	絵本「まつはきらい」原画 他	美術	31	

### 昭和63年度の利用状況 (S63. 4. 1~H1. 3. 31) 開園日数304日

区分	有料		減免	合計	
	一般	団体			
入園者	大人	31,199	2,005	256	33,460
	子供	8,888	5,024	657	14,569
	小計	40,087	7,029	913	48,029
博物館 入館者	大人	40,013	8,038	2,432	50,483
	子供	24,032	17,598	332	41,962
	小計	64,045	25,636	2,764	92,445
プラネタリウム 観覧者	大人	42,795	6,270	1,436	50,501
	子供	30,039	20,659	243	50,941
	小計	72,834	26,929	1,679	101,442
合計	176,966	59,594	5,356	241,916	

単位(人)

## —最近の発掘調査から—

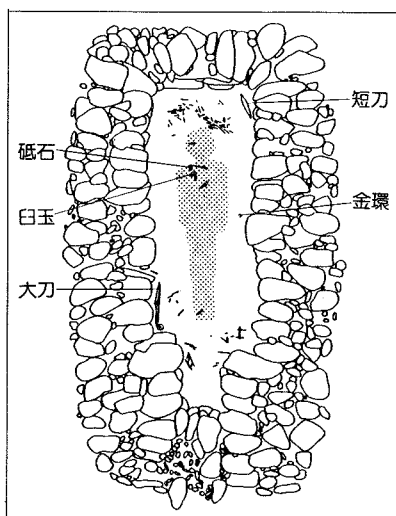
この春、府中市で初めて古墳の石室が調査されました。この古墳は、以前に「あるむせおNo.2」で紹介した高倉古墳群に含まれるものです。石室を持った古墳は、府中市の周辺では多摩市の「稻荷塚古墳」、日野市の「万蔵院台遺跡」、国立市の「下谷保一号墳」などがあります。今度みつかったこの石室も、これらの古墳に劣らない立派なもので、多摩地区のなかでもたいへん保存状態が良く古墳の構造を考える上で貴重な資料となります。



さて、この石室ですが縦約5m、横約3m、深さ約1mの四角形に掘りこまれた穴に河原石を積み重ねて造られています。よく見ると部屋の壁となる石は、同じような大きさで長く平らな形のそろったものを使っています。一番下の段は大きな石を使い、これらの石は上になる面が平らになるように石の下を石の形に掘りこんでいます。また、玄関（部屋と通路を区別する部分）と奥壁には特に大きな石が使われています。石の積み方は、「持ち送り」と呼ばれる方法で積み上げられます。これは、一段目より二段目とだんだん内側に出っ張るようにして積まれます。つまり、下は広く上に行くにしたがいだんだんと狭くなるようになっています。こうすることによって、天井石が比較的小さなものでも十分にふたができるわけです。義道部と呼ばれる通路部分の南半分は、部屋を作っている河原石よりひとまわり小さい石を方向を変えて

積み塞いでいます。ただ、この通路は狭いこと地面の中にあることから、実際に通路として使われたものでなく、形だけのものであり、石を詰めて塞いだことも形だけのことがわかります。敷石については、北側約1/6が小さい石を使い、残りの部分は手の平大の石を使って敷き詰めています。

石室の中からは、大刀1口、短刀1口、鉄鏃（鉄製のやじり）約20本、刀子3本、金環1個、臼玉1個、砥石1個がみつかっています。埋葬が頭を北に足を南にして行なわれたとすれば、頭のまわりには短刀、刀子、臼玉、砥石、鉄があり、左手の辺りには金環、足下には大刀、鉄鏃があったこととなります。しかし、天井の石が崩れ落ちた時に置いてあったこれらの副葬品にあたって動いたことも考えられ、最初に置かれた位置のままかどうかわかりません。副葬品は、藤ノ木古墳ほどではありませんが、多摩川流域にみられる古墳と同じような組み合わせの品物がしっかりと納まっていた。



なお、この古墳は将来移築が出来るように、石の積まれたままの状態でごムの型と石膏の型をとりました。このようにしておけば、いつでもこの型に石をはめ込み復元ができるわけです。こういった技術は、遺跡の保存や活用には欠かせないものです。遺跡の調査の中にはこのような作業も含まれています。

（分梅町・仮称小沢マンション地区の調査から塚原）



郷土の森も開館以来2年がたちました。その間も園内では二期工事が続けられ、来園の方々いろいろなご不便をおかけしていましたが、去る4月、全工事が完了し改めてお披露目がされました。復原建築物は、府中宿の本店（旧田中家住宅）と旧府中郵便取扱所（旧矢島家住宅）を加え7棟になりました。また田中家住宅の横には広間と小間を備えた茶室も建ち、既にお茶会に利用されています。

一方、二期工事の主となっていた公園部分には、**野外ステージ、** **わんぱく砦**の裏の滝から流れる**水遊びの池**などができました。池では夏を待たずにもう元気な歓声が上がっています。ゴールデンウィークには青空の下、豪壮な国府太鼓が広場に響き渡りました。

博物館本館では、 $\frac{1}{6}$ ～ $\frac{1}{2}$ の間、**企画展 文字から探る古代の府中**が開催されました。先ごろ新聞紙上を賑わせた市内出土の漆紙文書の他、市内と近隣市域の出土文字資料を集めました。



季節ごとに実施している**自然観察会**は足を園外にも伸ばし、市中や多摩川べりを歩き回っていますが、夏休み中には**ホンモノ図鑑**を作ろう、**夏休みのまとめ相談室**などを企画しています。

その他、夏休みには空にちなんだ催しとして、**企画展 宇宙開発**に合わせた**プラネタリウム**番組の他、**星と音楽の夕べ**、**天文講座**が開かれます。

また、真夏の夜、復原家屋を舞台に語られる**森のお話会**は季節にふさわしいこわい話を特集します。恒例となった**おもちゃ**を作ろうや**縄文土器**を作ろうでは今年は何んな作品が生まれることでしょうか。

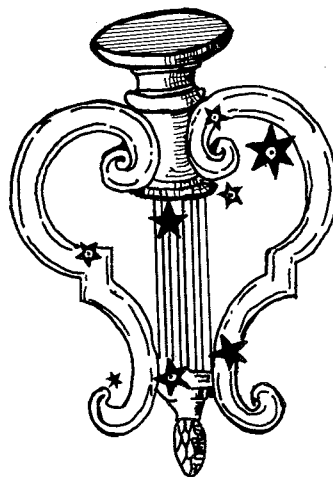
あれこれ

## 星空散歩—こと座のはなし—

夏の夜空、天高いところに一際明るく輝いている星が見えます。この星はこと座の一等星でヴェガといいます。このヴェガは全天で5番目に明るい星で、“夏の女王”とも呼ばれています。

ところで、ギリシャ神話では、音楽の名人オルフェウスが持っていた竖琴を神々が彼の死を憐れんで天にあげ、こと座という星座にしたといわれています。一方、中国や日本ではこと座の一等星ヴェガにまつわる話として七夕伝説や羽衣伝説などがあります。七夕の話では、ヴェガのことを織姫星に見立て、天の川をはさんで反対側にある、わし座の1等星アルタイルを彦星に見立てています。また、鹿児島県薩南諸島さつなんしよの中の喜界島きがいじまに伝わる羽衣伝説では、こと座のヴェガを天女に、わし座のアルタイルを牛かいに見立てています。そしてこの両人も天の川をはさんだところにいるといわれています。

こうしてみると、ギリシャ神話では、こと座そのものにまつわる話があるのですが、中国や日



本ではヴェガを織姫、天女に見立て、アルタイルと組み合わせて話が作られているのは面白いところです。

皆さんは、これからの季節、夜空に輝くこと座を眺めて何を連想しますか？ (K)

インフォ  
メーション

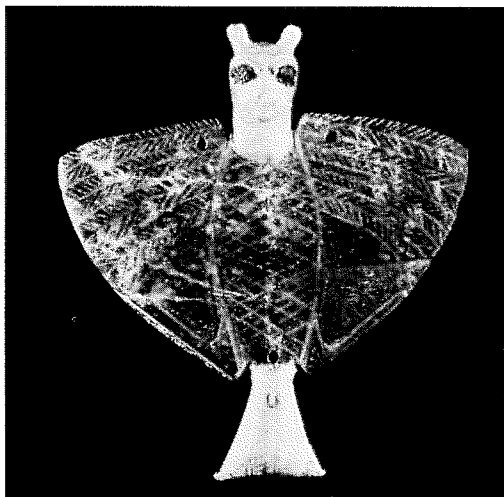
## 海のシルクロード

# 「古代シリア文明展」

11月12日～12月17日

今秋、市制35周年、郷土の森 博物館開設3周年を記念して、特別展を開催します。

シリアは、「オリエント文明の十字路」として、周辺諸文明の影響を受けて、多彩な文化を展開してきた地です。特に、シルクロードの最盛期には、各地に隊商都市が形成され、東西両文明の影響を受けた文物が多くあります。これらシリアの文物300余点を映像とともに紹介します。



獅子頭をもつ鷲の小像 (前2500年頃)

あるむぜお 第8号  
al museo イタリア語  
“博物館で”“博物館にて”の意  
発行年月日 平成元年7月31日  
発行 府中市郷土の森  
〒183 東京都府中市南町6-32  
☎0423-68-7921